



「2006年秋の大会」倫理委員会セッション報告

事例研修の意義と課題；倫理規程の浸透を目指して

倫理委員会委員 作田 博

倫理委員会セッションには約40名の参加者があり、会場の大きさと比較すると少し寂しい雰囲気ではあったが、会場との熱っぽい意見交換により、事例研修の重要性や企業倫理定着活動に対する意識の高揚をはかることができたと感じている。本セッションの概要を以下に報告する。

本セッションは、日本原子力発電・鐘ヶ江委員の司会により、慶應義塾大学・梅津先生から「ケースメソッドによる企業倫理の浸透と定着」の講演、東京電力・谷委員から「事例研修を活用した企業倫理定着活動；東京電力における活動例」の紹介、INSS・作田委員から「倫理事例集を使った事例研修の試行」が行われた。

梅津先生からは、企業の評価基準が変わってきており、従来は「収益性」と「成長性」であったが、昨今は「倫理性」と「社会性」が問われてきており、それらの価値変換は、企業倫理学、コンプライアンス論、CSR論、サステナビリティ論などの時代的背景があったと紹介された。また、企業倫理制度のしくみへの過信や法令遵守への過信など、制度の限界についても言及し、ケースメソッドによる個人の倫理の「習得」、「共有」および「習慣化」が制度の限界を補完するものであると強調された。

谷委員からは、平成14年の原子力不祥事以降、取り組んでいる企業倫理定着活動の概要について紹介があった。東京電力では、「行動基準、わかりやすい解説、QA集の読み合わせ」、「e-ラーニング」などを基礎的な理解を得るものとし、ケースメソッドは、応用問題として位置付け、精力的に取り組んでいる。その取組みの中では、

①ケースリーダーの理解不足、②当事者意識の欠如、③マンネリ化などの問題点も出てきたが、いろいろな工夫をすることにより対応してきた過程についても説明があった。

作田委員からは、7月に倫理委員会で発刊した書籍『原子力を中心とした技術者の倫理ケースブック』の紹介の後、ケーススタディの進め方、グループ・ディスカッションでの課題例の説明があった。会場の参加者には「ケースブック」から抜粋した一つの事例を提供した。事例の概要は、エンジニアリングプラスチック製造の老舗である会社で、他社との熾烈な競争に打ち勝つために顧客の承諾なしに難燃性能を下げたというものである。この事例を詳細に検討していくためには、さらにどんな情報が必要かについて10分程度考えていただき、説明者があらかじめ用意した回答例について、同意見のものについては挙手を、それ以外のご意見は発表をお願いした。このあと、事例研修の留意点、倫理問題検討のヒント、倫理感醸成のポイントについて説明があった。

最後には、総括的な質疑応答を行い、本セッションを閉会した。